

第二期 第四十四号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2020.03.20 定有堂書店 発行

本屋の圏域

世界観 もしくはその欠如

ネコと暮らす

滅亡の永久

書評「メルリンの奇跡 日本サッカー煌きの一瞬」

ふよふよふぎゅっ日記

坪井日記 ㊥

巨大数と躓きの石

人形について

二月の「鳥の劇場」で

鳥取あれこれ その四十三

おっしょさんとチャペルミラ

大根の皮

片想い

…… 編集後記

奈良 敏行

古賀 啓三

萩原 俊郎

ワクサカソウヘイ

吉田 海将

鳥居 貴彦

齊藤 仁昭

芝野 浩貴

ムラカミヒロミ

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

あぎの素生

ドラマリア



本屋の圏域

奈良 敏行

(定有堂 店主)

二月十五日(土)に映画「ニューヨーク公共図書館」を観た。鳥取県立図書館を中心とした上映会だった。このところ公共性とか公共圏について興味があったので渡りに船とすぐさまチケットを予約した。百七十の席が売切れ寸前だった。みんなどんな期待をもって集まったのだろうか？

図書館があることで多くの人が豊かな幸せな時間を持てる。利用できるのは近隣の人に有利なように思われるが、でもその営みの多様性を知ることによって遠く日本のわたしたちも、もっと望んでいいのだという意欲をもつ。そんな感想をもった。

大事なのは可能性の「スケール」を具体的に示すということだろう。県立図書館の役割も、できることの多様性を幅広く具現することによって、県内隅々の住民が、近隣の公共図書館への期待をたかめる起爆剤になることかと感じた。

映画鑑賞をきっかけに、本屋の圏域は狭い方がいい、狭いところにしか立ち位置はない、と逆に考えるように

なった。「本のビオトープ」と称しているのもそんな気持ちからだったかも知れない。本屋の公共圏は、狭さの中にしか存在しないと、あらためて感じる。多くの人の期待にこたえるよりも、狭い半径の圏域を大事にした方がいいと思った。多様性よりもピンポイントだ。

公共圏に関心をもつきっかけはつぎのような流れのものにあつた。定有堂教室「読む会」の一月のテキストは『ギリシャ語の時間』、二月は『紙の動物園』、三月は『中動態の世界』の予定だ。『紙の動物園』は中国系アメリカ人の母と子の歴史的公共圏のアイデンティティの違いの悲劇だ。ほかの二つに共通するのは「中動態」というキーワードだ。わたしは「中動態」と「公共圏」を重ねあわせて考えてもいいのではないかと思い始めている。

『中動態の世界』はギリシャ文法などの説明が多く難解だ。でも小林秀雄賞を受賞しているのだから、きつと考えるヒントに満ちた本なのだろう。選考委員の関川夏央さんは末尾の「ビリー・バッド」（メルヴィルの小説）の話から始めた方がよかつたのではと言っている。たしかにその通りだ。

テーマは、善良素朴な船乗り、ビリー・バッドの悲劇だ。十八世紀末、イギリス軍艦の航海中に、海上で臨時徴用されたビリーが上官を殺害する。館長に気に入られ、

一種のねたみやいじめ、そして誤解がここにはあつた。軍艦という狭い公共圏では、事件の経緯がビリーに同情するかたちで、艦長や乗組員に共有される。情状酌量の余地ありというわけだ。しかし本国イギリスを中心とした公共圏域へと拡大すると、これはこのところ頻発する反乱罪で、日を措かず極刑となるべき事件だ。裁判もななく処刑も即日執行される。

近代以前には「共通した感性」（コモンセンス）があつた。それが中動態の存在と関わりが深く、このコモンセンスが薄れることよつて中動態が隠れ、受動態が出現してくる、とわたしは道筋を理解してみた。だから、公共圏は狭い方がいい。本屋は狭い公共圏を実現できる。

二月二十五日にはノンフィクションライター三宅玲子さんのレポートがウェブマガジン「ニッポン・ドットコム」に《書店員の「聖地」は本を求める人々が深呼吸するビオトープ ― 鳥取「定有堂書店」》と題して公開された。目にした旧友飯澤文夫さんは《「聖地」と言われることに奈良さんはどのように感じておられるか分かりませんが、「深呼吸する」はいいですね。それに、写真の奈良さんの嬉しそうな顔も》とメールを寄せてくださった。「音信不通」寄稿者の一人である古賀啓三さんは《定有堂神話、健在ですね。素晴らしいです。》とコメント。自分ではだんだん当事者意識が希薄になつてるので、独

り歩きしている「神話」という言葉が言い当てていると得心する。自分ではすべてが終わっているといいつづけて長い。

翌二十六日には、一九九八年刊行の濱崎洋三著『伝えたいこと』定有堂書店刊が、二〇二〇年度の同志社大学の日本史入試問題に採用されたという知らせが届いた。水戸学と討幕維新の文脈の中で、濱崎氏が最後の鳥取藩主池田慶徳（水戸徳川家からの養子）の時代錯誤を指摘した論点を、一連の問題文のつなぎ目に置いたものだ。尊王敬幕論が攘夷討幕へねじれていく瞬間をよくとらえた論考だ。

定有堂最初で最後の出版とうたった『伝えたいこと』と著者の業績が、適切に注目されたのがとてもうれしい。濱崎洋三先生（故人）は定有堂教室「読む会」の創設者で、この会は三十年過ぎていまでも続いている。この果報に想いを馳せて、本のビオトープという狭い公共圏で、ゆったり深呼吸してみた。

2020. 02. 28

- ハン・ガン『ギリシャ語の時間』晶文社 2019
ケン・リュウ『紙の動物園』ハヤカワ文庫 2015
国分功一郎『中動態の世界』医学書院 2017
濱崎洋三著『伝えたいこと』定有堂書店刊 1998

世界観 もしくはその欠如

古賀 啓二

（米国ミシガン州 隠棲）

ミシェル・ウエルベックによる小説『地図と領土』の主人公はマルチ・タレントな視覚芸術家で、媒体として写真から出発し、油彩、そしてビデオへと変遷するが、その全てで成功を収める器用さは、現実ではあまり聞かない。

以下が、フェイズとしての媒体とその対象である。

- (1) 写真 ↓ 機械、地図
- (2) 油彩 ↓ 人
- (3) ビデオ ↓ 植物

視覚芸術家は機械、地図、人、植物で世界を客観的に描き切ろうとし、批評家にそのキャリアを俯瞰させ、ジェド・マルタンの仕事は「世界の有様を巡る、冷静で超然とした思索から生み出されたものだ」と解説させることで、企図が達成されたことを読者は知る。

この「世界」、という言葉は全編を通じて、これでもか、と頻出し、最晩年、美術誌の記者のインタビュにも、唯一「わたしは世界を説明したい……。わたしはただ**世界を説明**したいのです……」と繰り返すのみである。

「世界の表象」の下部概念として、「職業」が彼の意識を広く占めるのかもしれないが、後年芸術史家たちは、どの媒体による作品も**人間の労働へのオマージュ**という様相を呈している、と評す。

ギャラリーのオーナーとの会話で、ジェドに「ある人の境遇について知りたいとき、する質問は何だろう？ まず職業を尋ねるよね。人間を定義づけるのは、何よりもその人物が生産過程の中で占めている位置であって、子を生み殖やす者としての役割ではない」と語らせている。また彼の父親も息子に対してこう云う。「人々は懸命に、時には身を削って労働に励むが、それは利益への欲望に駆られてではなく、単純に職務に対する誇りからだ。そう……。お前が絵でやろうとしていることと、何か関係があるかもしれないな」

(1) 特に機械（工業製品）が労働の成果であれば、(2)への展開が「社会のメカニズムを動かしている様々な歯車（生産者）を、絵画で描こうという意図」であることが了解できる。

しかし、主人公にはアーティストという職業に対し、微かな引け目のようなものを抱いていることも嗅ぎとられる。

アーティストとしての位置が確立したのち、「あなたにとつてアーティストであるとは何を意味しますか？」と問われると、ジェドは「アーティストであるとは、**従順**な何者かであるということ。それは神秘的な、予見できない、**直観**としか呼びぶような種類のメッセージに対する従順さ、なのだが、このメッセージは一連の作品群全ての破壊を命じることもありえた。それは根源的に新たな方向に向かうためだったが、しばしば、何の方向も、些かの計画も、継続への少しの希望もなしの破壊でもあった。これがアーティストであることの困難さであるが、この点で、この点のみ、アーティストであることは他の職種や**職業**と異なっている」と答える。誤差のない精密工業製品を作り出す技術と熱意は、研鑽することで培われ、**直感**によるメッセージに従うことで得られることはない。次々と媒体を変え、その継ぎ目にはかなりの時間の無為があることなど、真つ当な生産者には无缘だ、ということであろう。

文学は屢々小説家や絵描きといったアーティストを題

材とする。それは彼等を通じ、意味のある芸術のテーマ、という作家自身の葛藤・探求を登場人物を通じて自問・模索しているのではないだろうか。ウエルベックのこの作品も例外ではなく。

美術（絵画）に於けるサクセスの古典的見解が以下のように述べられる。

「美は絵画において二次的な問題であり、過去の偉大な画家たちがその偉大さを認められたのは、彼らが世界に關して一貫性のある、しかも革新的なヴィジョンを展開したからだだった。それは彼らが常に同一の描き方、常に同一の方法、手段によつて、この世のものを絵の対象に変えたということ、そして彼らに固有のその方法が、それまでは全く用いられたことがなかったということ在意味する。彼らのヴィジョンが包括的であり、現実の、あるいは想像上のあらゆる対象、あらゆる状況に適用することができるようになると思えるとき、彼らは一層高い評価を得た」

おそらく、例えばキュービズムのような……。

主人公が希求したのは、同時代社会の産業部門についての包括的ヴィジョンである。文学に擬えると、例えば全体小説のようなものか。

この作品を薦めて頂いた奈良さんに、読みましたよ、と伝えると、それではお前の世界観とは何か、と問われ

る。

僕は小説に手を染めたのが五十過ぎと圧倒的に出遅れたこともあつてか、当方から発信する包括的ヴィジョンなどあるべくもなく、潜在意識の深いところに釣り糸を垂れ、アタリを待っている、断片的な「ヒューマン・コンデイション」の受信体、アンテナとかセンサーといったような存在だと思っている。

今書いている作品は、前作で、登場人物の作家が書きかけの作品であると、その骨子だけを作中で紹介したものを実作している。小説が己に言及するメタ小説というものがあるようだが、これは、小説が実作者の日常に干渉する、いわばメタ人生とでもいったモノである（笑）。

『地図と領土』では、ウエルベック（著者が作中に登場）はジェドの「**小説の生産者の肖像画**」のモデルとして登場するが、それが原因ともなつて惨殺される。死体は（アルゴンレーザーカッター、という外科手術用の「**精密機械**」で）切り刻まれ、鑑識がその「**地図**」を連想させる、ポロックを思わせる居間の床に散らばった肉片が作り出す複雑なモチーフを、影のない明瞭な写りで、ほぼ真上から撮影する。

これは媒体フェイズ（1）と（2）をカバーしており、こういった擬り方・仕掛けを僕は好きだ。

ネ「ト」書「ト」す

萩原 俊郎（倉吉市在住者）

昨年秋まで、2年半に及んだ東京での単身赴任生活。周りから「再婚したばかりで奥さまと離ればなれなんて、さぞかしお寂しかったでしょう」と言われ、せつかく同情してくれたもんだから、こちらも「ええ、まあ。そんなところです。エ（へ）とモゴモゴよく分からない返事をするのだが。

まあ本当のことを言うと、夫婦も互いに還暦ともなれば、どうつてことはない。それより何が辛かったかつて、ここだけの話、東京から月に一回帰るたびに、わが愛する黒猫の「キキたん」がどんどんアカの他人（他猫）になつていくことだった。

実はわが家は「一夫一婦制」ではなく、世界でも珍しい「一夫（一婦）一猫制」を採用している。

カミさんと暮らし始めて数カ月経ったころ、そろそろ私に飽きてきたのか（まあ、還暦前だから）、「ねえ、猫、飼っていない？ 飼いましようよ」と言ってきた。彼女は再婚する直前、東京で長年暮らしていた猫を亡くしていた。

彼女からは再婚する前、はつきり言われた。「私が生きて

いく上の優先順位はねえ、一番が猫、二番は馬（競馬）で、人間は三番だから。でも、安心して。人間の最上位にいるのはあなただから」。うーん、喜んでいいのだろうか。

カミさんは京都、東京と女ひとりジヤズを生業に暮らしてきた。彼女の亡くなった猫たちの話を聞くと、なんだかペットというより、苦難を乗り越えてきた「同志たち」のように感じる。

さて、カミさんのリクエストで、知り合いの倉吉市内の動物病院がやっている保護施設に出かけた。

大きいのが、小さいのが、三毛やブチ、いろいろいる。

気がつけば、私の方がはしゃいでいた。「おお、シヤム的美猫がいるじゃないか。すでに大人の猫だったが、ひと目惚れで里親になることを決めた。「ナナ」という、いささかセクシーな名前も付けた。が、カミさんの評価は「シヤムというより、タヌキねえ」。気を削ぐこと、はなはだしい。が、連れて帰って間もなく、ナナにはある「問題」が見つかった。

グルグル喉を鳴らして甘えて来るが、絶対「抱っこ」させてくれないのである。最後の一線は守る「身持ちの堅い」猫だったのである。「前の飼い主の影響なのかなあ」とカミさん。「抱っこできないなんて、あなたがかわいそう。よし、もう一匹、飼おう！」彼女のペースにはまっている気がしたが、後のまつりだった。

ナナは「カミさん用の猫」にして、もう一匹、今度は子猫をもらうことにした。はじめはふわふわモヘアの子猫に目をつけていたが、同行していた娘が、顔が逆三角形のようにガリガリに痩せた哀れな子猫を見つけ、「こっちにしようよ」と言った。

黒猫なのであのアニメにちなんで「キキ」と命名したが、よく考えれば主人公が「キキ」で、黒猫は「ジジ」だった。こうして「わたし用の猫」との生活が始まった。

小さいキキたんはこたつの中で育った。どうやら黒いパジャマを着た私が親猫に見えるのか、前足で「ふみふみ」しながらパジャマに顔をうずめ、チューチュー吸ってくる仕草がかわいかった。

昼間はカミさんが両方の猫の面倒をみるが、私が帰宅するとナナはカミさん、キキたんは私の担当となる。そんな「一夫（二婦）一猫制」が定着したころ、突然「東京転勤」の辞令が下った。

もともとキキたんは兄弟姉妹で一網打尽につかまった猫らしかった。そのため警戒心が強く、来客があると家の隅に隠れて一日中出てこないことがあったが、やがて私が東京から帰ると、同じように姿を消すようになった。ベッドの下でようやく見つけ「キキたん、いい子にしてたか」と手を伸ばすと、「フーン」と威嚇のうなり声をあげ、爪を立ててくる。ほ

とほと気が滅入った。

「もうキキたんとは、親でも子でもない！」（どう見ても、そうなのだが）と悪態をつくものの、失った2年半は戻ってこない。子猫だったキキたんも3歳過ぎ、人間でいえば、すでに女ざかりの三十路に入ろうかという猫年齢。思えば、昔もそんなことがあった。足かけ5年半、二度に及ぶ大阪勤務。ようやく家に帰ると3人の娘たちはすっかり大きくなっていた。

それでも、キキたんとの「修復」は少しずつ進んでいる。先月はずいぶりに「パジャマにチューチュー」が復活した。そうそう、その調子。

「猫と一緒に暮らしていると、だんだん猫に似てくる。歩くとき足音を立ててなくなる。怠けものになり、団体で行動するのが大儀になる。誰かに忠誠を誓うのが面倒になり、薄目をあけてあたりをうかがい、楽なほう楽なほうと考えるようになる」。無類の猫好きだった脚本家の向田邦子は、そう書いている。

そうだ、これからは「猫らしく」生きればよい。団体行動も、誰かへの忠誠心も、もうまっぴら御免だ。私には私の生き方がある。

滅亡の永久

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

ひとつ下の世代の書き手たちは、軽やかにネットを使いこなしながら、当然的に読者へのテキストデータ直売を行っているというのに。

昭和生まれの私という文筆業は、いまだそのような商いに手を出せずにいる。

なんだかさ、躊躇が走るじゃないですか、自らのテキストに「課金」を設定するなんて。「ええい、持っつけ、ドロボー」の精神で売文を続けてきた身としては、自分のテキストの価値を自分で決めるだなんて、照れてしまうものなのです。行儀やふるまいもよくわからないし。

しかし、インターネットでの「出版」活動に興味がないわけではない。むしろ、俄然、興味がある。インターネット世界における文化環境はいまも現在進行的にガンガン深まり始めていて、面白そうなことができそうな「空き地」は毎日のように誕生している。そこでは「著者」と「読者」の関係も、ものすごいスピードで変化していっ

ているのが肌感覚で理解できる。大きいものには、巻き込まれたい。アナログ体質な私も、ようやく、うずうずとしたものを感じ始めている。

先月号の『音信不通』、その当連載欄の最後に「執筆者からのお知らせ」として、以下の文面を掲載した。

「Note でコラムなどもアップしています。投げ銭ができるので、この欄を読んだら幾ばくかのお金を入れてみてください」

集金の案内である。試しに『音信不通』を通じて、いくらくらいの小銭が懐に飛んでくるのか（遊ぶ金欲しさに）実験してみたのだ。

さて、その気になる結果は。

「¥0」でした。

ああ、世知辛い。これを読んでいるそのあなた、恥をしのんで集金の案内を出した私の気持ちを、すこしは察していただきたい。

とはいえ、この一か月、「もしかしたら今日こそは口座に小銭が振り込まれているかも！」とドキドキしながら目覚める日々は、なかなか楽しいものであった。営みつつ、完結するよりも、その道中が一番ワクワクするものですね。

で、話は変わって。

先日、東郷池のほとりにある最高本屋『汽水空港』に

招かれて、トークイベントに出演した。共演者は、フアッシュョンブランド『途中でやめる』の主宰にして、著書『バイトやめる学校』でインターネット時代の自活のメソッドを惜しげもなく披露している、山下陽光氏。イベントの中では互いの哲学や経験値に基づきながら、「各個人が不自然な労働をすることなく自活していく方法」について、あれやこれやと喋り合った。来てくれたお客さんにあとで話を聞いたら、「ワクサカさんが途中でアッパリーな勢いで喋り出して、クスリでもやってんのかと思った」と言われた。楽しかったんだな、自分。

イベント終わりに山下さんに、個人的な質問を投げかけてみた。「noteでコラムを売るって、どう思いますか？」。

山下さんからの答えは、実に明解だった。

「noteは投げ込まれたお金のうち、10%以上も胴元が持つていく。だから自分はまだ好きではない。それよりも、キャッシュレス決済機能とかを使って、LINEでテキストを売るっていうのはどうですか？」

ああ、最高の答えである。そうだな、もうそんなことができる環境は整ってしまっているんだよな。出版社に頼るのは別の方法で、読者にテキストを届けることが、ライトにできてしまう時代なのだ。

で、こっからなにをしようかというところ、紙のZINEを作ろうかと思っている。第一号は磯遊びの愉快さを特集

する『磯ZINE（イソジン）』である。

結局は、紙を選んでしまった。それは紙の出版物に強いこだわりがあるから、とかそういうわけではなく、やっぱり紙の「滅亡性」に射程の長い価値を感じてしまうからだ。

データって、つまり「永遠」の言い換えなのだと思うている。で、永遠って、実は射程が短い。ずっと消えないものは、垂直に消費され、すぐに忘れられる。かつてE.S.が台頭した時、それは永遠めいていて、実際にそこでログされた個人の日記データなどはいまだ「永遠」としてインターネット上に残されているわけだが、しかし死ぬのも早かった。

で、データと違って、紙はいつか消えてしまう。焼けたり古くなったりして、いずれは塵となる。その「滅亡性」にこそ、私は「真なる永遠性」を感じている。

紙と心中しよう、という話ではない。字数が尽きたので、この話の続きは次回に持ち越します。

・お知らせ

WEBメディア MAGAZINEにて『エクソダス・フロム・イシヨク ジュー』という連載をやっています。是非、検索して読んでいただければ幸いです。

書評 「ベルリンの奇跡 日本サッカー煌きの一瞬」

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

イターの賀川浩は「インテリのスポーツだった」と、当時のサッカーを表現している。「数少ない洋書の技術書を片手に日本語に訳し、テキストにする。それをグラウンドの土の上で実際にやりながら、また考え直す」と、学生たちの日々を語る。一方で、ダンスホールに通ったり、外食ですぎ焼きを食べべべしたりと、優雅な学生生活を送っていた選手もいたようだ。

飛行機のない時代。ベルリンへの道はシベリア鉄道経由だった。途中、草原でボールを使って体をほぐしもした。1万3千キロの過酷な旅を終えた彼らを、ベルリン市民は「ナチス式敬礼」で歓迎したという。

五輪におけるサッカー日本代表の活躍と云えば、得点王にもなった、あの釜本を擁した1968年メキシコ五輪の銅メダルをあげる人が多いだろう。本書は1936年ベルリン五輪に初参加し、優勝候補と言われた強豪スウェーデンを破る快挙を成し遂げた強者たちの奮闘と、その後を追ったノンフィクションだ。

著者は、CMディレクターの竹之内響介。「ベルリンの奇跡」に詳細な資料や証言から迫り、終戦後にシベリアに抑留されて亡くなった主将や、父との縁を感じながら生きる娘にもフォーカスしている。

当時の日本代表は、ほぼ大学生だった。16人中、早大が8人をしめ、その卒業生も3人いたという。本の監修を担当し、90歳を超えて執筆活動を続けるサッカーラ

到着後、地元のクラブチームとの練習試合で目の当たりにしたのは、同じスポーツの中にある大きな違いだった。例えば当時、日本ではボールに触ろうとするゴールキーパーに、体当たりのチャージをするのが普通だったが、現地ではこれが厳格に罰せられた。チャージがないのだから、日本のゴールキーパーも、ボールをはじく。パシフィックではなく、しっかりとキヤッチをするように守備の方法を変えたという。

また、日本はバックを2人置くシステムを採用していたが、現地の主流は3バック。センターフォワードと両ウイングに対応するための布陣だった。一方、日本の3人のフォワードは、相手にマンツーマンでマークされ、

思うようにプレーができなかった。

「守備をツーバックからスリーバックに変える」

翌日のミーティングでコーチから、システム変更の方針が発表された。本番までわずか20日だったが、選手たちの修正能力は著しかった。現地の「蹴球週報」は、「彼らはもう新しい守備法を学び取ってこれを適用していた」とたたえた。

運命のスウェーデン戦。自陣に押し込められた展開が続き、急造の3バックで奮闘するも前半で2点のリードを許した。後半、スピーディーなショートパスや個人技で反撃に出た日本が追いつくと、スタンドの多くの観客は、日本を応援し始めたという。ついに逆転して試合を終えると、観客はグラウンドにだれ込み、帰途につく選手が乗ったバスをも囲んだ。初戦で死力を尽くした日本は、次戦はイタリアに大差で敗れ、大会を終えた。

4年後の1940年大会は、東京で行われる予定だったが大戦で幻に。スウェーデン戦を経験した中心選手らも戦地で帰らぬ人になった。

なぜ、日本はスウェーデンに勝てたのか。賀川は、1得点して、後に「シュートの名人」と言われ、釜本にも大きな影響を与えた故・川本泰三氏の言葉を紹介している。「外国の選手は見本が目の前にあるわけですから見てどんどんうまくなるわけです。ところが日本には何も

なかった。考えるしかない。だから俺たちほどサッカーをつきつめて考えてないんじゃないか」

サッカー黎明期の時代、多くの選手は、いつか日本でも必ずメジャーなスポーツになるであろうと信じ、夢見てプレーをしたのではないだろうか。資料の写真の選手たちの目の輝きは、代表選手と言うよりも少年のようだ。様々なハンディキャップに屈せず戦った選手たちの言葉や行動は、現在のサッカーを再考する材料にもあふれている。

日本サッカー協会の殿堂入りしているチームは、このベルリン五輪代表と、あのメキシコ五輪代表だけだ。東京五輪の前に、「ベルリンの奇跡」の「新しさ」に学び、その後の選手らの飛躍を阻んだものについてもすっかり考えたい。

竹之内響介 著／賀川 浩 監修 『ベルリンの奇跡 日本サッカー煌きの一瞬』 中日新聞東京本社 2015

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

「ふようふきよう」という言葉が飛び交っている。お控えください、と。

本に賞味期限はない。本が読めなくて肺炎になることはたぶんない。いつでも開いててなんかある。それが本と本屋のいいところ。だから「ふきゆう」はわかる。いそがなくともいいよ。本買いにきたくらいでそんな急かされてもこまる。できるならのんびり選んでほしいし、ゆっくりしていつてよ、いつも心の中でつぶやいている。別の用事があるならそれ済ませてからでもいいやんか。でも「ふよう」っていうのはどういふことなんだ。

オザワさんが神戸からやってきた。「最近どうですか」とか言いながら棚を一生懸命みている。ついヘラヘラと

話しかけそうになるのをこらえながら様子をうかがう。

「これと…あともう一冊買ってもいいですか」と不思議なことを聞く。「これ…」と指差したのは『90年代の若者たち』島田潤一郎(岬書店)だった。版元にもうないことはお互いに知っている。在庫をもっている書店も少ないらしい。「自分が読んでたぶんもなくなっちゃって…」となんだかうしろめたそうにもごもご言う。本屋で買ったらあかん本ないでしょう。最後の一冊ですけど、とこたえてもまだなにか納得がいかないようだった。しばらく考えて「いや、やっぱり美しくないなこういうのは」と言い出した。最後の一冊の旅立ち方として、同業者が買っていくのは美しくないという。もっと手にするべき人がいるはずです、といって別の本を物色しはじめた。オザワさんが帰ってからはしばらく美しい買い物のことを考えた。

店の外の棚を整理しているとてっちゃんがむこうから走ってきた。どこかに急いでいるらしい。「こんにちはー」といいながら頭をさげる。おー、と適当な声が出る。どこいくんやー。数ヶ月前、初めて来た時はお母さんにしがみついて離れなかつた子が。ねえ。こんにちはーって言ったぞむこうから。しばらく呆然と背中を見送る。そんなびつくりすることちゃうか。あ、なんちゃらサバイ

バルのシリーズ、何冊かみつけたよって言い損ねた。『海のサバイバル』先に読んだけどちょっとおもしろかったで。

長谷川さんがなにやら絵本をもってきた。「これ読んだ？よかったよ」と手渡されたのは『死んだかいぞく』下田昌克(ポプラ社)。長谷川さんはたまにこうして絵本を手渡してくる。そういうときは黙って従うことにしている。ばらばらめくるだけのつもりが、いつのまにか没頭してしまった。どきどきする本やなこれ。なんやろねこの感じ。「ええやろ」と二人でとくになにも生み出さない会話をする。

たなべさんがめずらしく強い口調で「とりいさんぜつたい読んだ方がいいです」と言い出した。『ごろごろ、神戸。』平民金子(ぴあ)。へーそうなんや、といいながら神戸の話ねえとあまり乗り気ではない。たなべさんはまだ話している。「ごろごろってベビーカーの音で」とか。そうか、それは読まななあ。と一冊だけ注文してみた。段ボールからだしてばらばらめくってみる。うーんこれは。そつとスリップを抜いて枕元に置いておくことにする。

改めて振り返ると、やっぱり「ふようふきゅう」だなあと思う。「ふようふきゅう」なやりとりばかりだ。美しい買い物も、なんでもない挨拶も、どうしようもない会話も。本を売ることが仕事だと思っていたがそれすらしていない。教えてもらってばっかりじゃないか。一円も儲からない。「ふようふきゅう」なことばかり起こる。

「ふようふきゅう」な日常が本当に不要だというのなら、不要のままできてやろう、とおもう。いままでも不要だった。これからも不要のまま。なんのために、どういう目的でとか、いらぬ。不要な存在。それでいいのではないか。不要な存在が、いちばん必要なのではないか。

と、そんなことを考えながら近所の食堂ときわで中華そばをすすする。大将がテレビを見ながら大きな声で「わしら貧乏人はコロナなんて高級な感染症にはかからへんのだ」と言った。あ、そうなんや。よかったあ。

坪井日記

(25)

齊藤仁昭

(長崎書店)

1月某日

原稿を書かないといけない日にインフルエンザを発症して2月号の原稿を落としてしまう。申し訳ありません。予防接種はしていたのだが体温計がエラーになるほど体温が上がり朦朧とした。よくわからないのだが抗インフルエンザ薬ではなく漢方薬を処方された。どちらもあまり効果は変わらないとの説明だった。そのせいなのか何なのか、しかしなかなか熱が下がらず長いこと書店を休んでしまった。消耗の余韻で2月はずっと元気がでない。さらに悪いことに子どもにまで移してしまい40度超え。1歳児が40度の熱とか見ているかわいそうだった。が彼には抗インフルエンザ薬が処方され発熱の翌日には熱が引いてひと安心。生まれてこのかたインフルエンザにかかったことがないという妻は今年も無事だった。お強いこつて。

1月某日

今年はあるがたいことにシングル盤を3枚出す予定だ

が、1枚は7インチレコード、2枚は8cmCDというフォーマットである。全部聴ける人は少ないのではないだろうか…。

2月某日

プレミアリーグではリヴァプールが圧倒的な差をつけて首位である。マンチェスターシティとの2強争いとなると思っていたが27節終了時点で2位シティとの勝ち点差は22。最速で31節には優勝が決まってしまう状況。どのポジションにも隙がみあたらず強すぎる。だがチャンピオンズリーグではアトレティコマドリーに先勝を許してしまったのが面白い。シティは怪我人の多さが痛手だった。しかもファイナンシャルフェアプレーに抵触したらしく来シーズン以降のチャンピオンズリーグにも出場できないと泣き面に蜂。3位はレスタークが健闘。かつてリヴァプールを優勝目前まで仕上げたブレンドン・ロジャーズの手腕も光るが、選手も調子が良さそうだ。かつての栄光はどこに消えたのかマンチェスターユナイテッド。なにがしたいのかもわからない。チェルシーはランパードがこんないい監督になるなんて。サッカーも見ていて楽しいし是非4位以内に入ってほしい。トッテナムはモウリーニョが来たけれど、かつてのようなオーラが消えている気がする。モウが丸くなってもあまりい

いことがないような。アーセナルにはミケル・アルテタが就任。がんばってほしい。

サッカーのことなら延々と書いてしまおうのだが、サッカーのことを書くべきなのは間違えている気がするの
で、セリエ、リーグ、ブンデスなどのことはまた今度に
します。

2月某日

私事ですが（いつも私事しか書いていませんが）、2月いっぱいまで長崎書店での職を辞することとなりました。八代市という熊本市より40キロほど南の街でサラリーマンをします。丸4年しか勤務しておりませんがたくさんの人々と本を間にして関わることができ、たいへん勉強させていただきました。書店員はとても楽しい仕事でした。ただ月に数日は店の手伝いをさせてもらうことになりそうですし、書店通いもやめないので離れるという実感もあまりありません。環境が変わっても書店とのかかわりが続く感じが良いなと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

山が崩れる 立ち木流れる
港がのまれ 皆立ち尽くす

声にならない昔の流行り言葉
肩を落としてただ茶をすすする
ただ茶をすすする

マジでくたびれた 風呂で爆睡だ

たまにやゆったりおー月明りおっととすげえな

君も入れよ

良い子見つけて楽しくなって歌った

挨拶してから 練り歩く

海から山へ 止まることなく

夏は汗ばみ 冬はこわばる

声にならないふたりの流行り言葉

涙落として笑い転げる

笑い転げる

孫の約束果たしてやれるかな

街へ繰り出しました振り返る

（ケバブジョンソン 「孫の約束」、作詞・橋本悠）

無限に向かう人々

②

巨大数と躓きの石

芝野 浩貴

(地球探検家)

一個の石ころ。Einstein。空港やストリートの名前に人名が使われることもあれば、沖繩に多いが地名が人名の人もある。草木や海山を人名にしたユダヤ名。名前もないタイの子供達。人名論を授業でとりあげてからもう20年が過ぎた。(アフガンでは子供に「ナカムラ」と名付ける親も増えたが標的差別にもあっている)しかし、今回は名前の話でなく石の話である。ソ連崩壊後にベルリンに行つてベルリンの壁のかけらを拾つたことがある。その時にはドイツ、オーストリア、ハンガリーのシュトルパーシュタインというつまづきの石のことを知らなかった。ホロコーストを忘れないように犠牲者の名前と死亡日を刻んだプレートとして道に埋め込まれている。

(アウシュビッツ収容所解放75年)

つまづいたわけではないが、安土城の石段を登るときは多くの石仏が埋め込まれているのを見た。映画「シュヴァルの理想宮」を観て色々考えた。実在する建築物な

のでいつかは日本にも知られただろうが、澁澤龍彦が世界3大空想人の一人としてシュヴァルを紹介したことから広まった。ドイツ嫌いでフランス語を専攻した縁で澁澤はシュヴァルの存在を知る。シュヴァルは郵便配達人で毎日30キロ歩いていたが、43歳の時石につまづき、その石の奇抜さに魅せられ、様々な石の蒐集を始め、33年、9万3千時間かけて宮殿を完成させた。絵葉書で得た知識で我流にデザインしたため、イスラム、キリスト、ヒンズーなど一つの宗教に偏らない古今東西の動物や人が彫り込まれている。シュヴァルはフランス語で馬を意味し、ピカソは理想宮に敬意を評して馬の絵を描いている。ゲルニカへの閃きだったのだろうか、小石はカウンターを意味する。ガウデイらしき建て方とカウンターカルチャーとなると、日本のガウデイの岡啓輔を訪ねずにはいられない。私は岡氏の逆バベルの考えに賛同もしていたので、三田にある蟻鱒鳶ルを見に行った。着工から14年目でまだまだ途上であるが、オリンピック前に駆け込みで建てる巨大ビルとは比較にならない無限への誘いがある。

どれくらい石を積みば達成できるのか? calculi(小石)を積むというのが計算の語源。コイサンマンは一つ、二つ、三つの次はたくさんと数える。小さい頃に大きな

数を考える時、1、10、百、千、万、十万…、億、兆から京のあたりで止まっていた。塵劫記には無量大数の10の68乗が一番大きな数として載っていたのではあるが。海を埋め尽くす砂の数が大きすぎて、指数を生み出したのなら、宇宙の素粒子の数は10の80乗で10の100乗(グーゴル)より小さいので、グーゴル(グーグールの語源)までいいとなるが、ブラックホールが可視化され、たった53個の量子素子で1千兆個のトランジスタを持つスパコンでもできない計算を実行する量子超越の時代に入ったのでそうはいかない。(1万年が200秒に)ラムゼー理論から大きな数の象徴であるグラハム数が生まれた。しかし、巨大数の専門家の鈴木真治さんとフィッシュンさんによると、グラハム数は数学の証明の中で生まれたので巨大数ではないということであった。アルキメデスの牛の問題は10の20万乗のクラスの問題。グーゴルプレックス(10のグーゴル乗のこと)を最大数としておけばいいのか? 10の100乗年後にブラックホールが消え、10の数百乗年に1回の割合で真空崩壊が起こるとトンネル効果で偽の真空が真の真空へ向かう可能性が出てくる。いかなる計算可能関数より急増加するビジービーバ関数(この命題は働き方改革への皮肉か)の存在はあっても、アルゴリズムは疑問視されていたところ、チャイティンが生物学で生物進化を説明するのに使っていた。二人の専門家の

対談で1番印象に残った言葉は「意味はないが理由はあ
る」というもの。チューリングがビット数で人間の頭を
表そうとした時、ゲーデルが人間の思考は有限でないと
批判した。人の存在の意味を問わなくても理由はあると
言いたいのか。ゲーデルがアメリカでの市民権を獲得す
る時の保証人はアインシュタインだった。巨大数人名論
を考えるかな。

〈参考分野〉

数学基礎論、集合論、巨大基数論、計算可能性理論、
再帰理論、圏論、逆数学

(追悼) 高橋祐樹様。君の亡くなった年齢の時、私も
教員引退したんだけど、若い頃倉吉で色々やったね。
学校の低迷期に常識を色々覆して。生徒指導・進路指
導・部活指導・教科指導をリンクして総合的に話せる
人がいなくなつたよ。全国で最初で最後の唯一無二の
体育の専攻科主任。鳥取に帰ってから君は順風満帆だっ
たから私は音信不通してて、君が教育長になつたら違
う視点で話に行こうと思つたけど、先に逝つちやつた
ね。そっちに行ったらまたあの歌を聴かせてくれ。そ
の時に積もる話をしよう。安らかに！

人形について

ムラカミヒロシ

（ライオン・ブックマン）

かも知れない。題名のダブル・ミーニングが誠に秀逸である。乱歩の人形好きは夙に有名で、「押絵と旅する男」「蜘蛛男」「黒蜥蜴」等々、人形ネタには事欠かない。ジュヴナイルでも妖艶な人形を登場させていて、「悪魔人形」では、振袖姿の等身大の活き人形が、夜中に動き出す。連載当時の挿絵は石原豪人で、少女雑誌の中で只ならぬ雰囲気を醸し出していた。

人形愛という言葉の発案者は澁澤龍彦で、ピグマリオンズムの訳語として考えられた。その後、この名を標榜する文学作品や、人形の実作家が夥しく輩出するにつれ、すっかり定着した感がある。

ギリシヤ神話のピグマリオンは彫刻の名工。象牙を刻んで、生身に見紛う女性像を作り、これを愛する余り、ヴィーナスに願って妻とした、という故事がある。

バーナード・ショーは、そのままのタイトルで、原典とは似ても似つかぬ皮肉な芝居に仕立てた。これを映画化したのが「マイ・フェア・レディ」である。

メリメの「イールのヴィーナス」は、逆ピグマリオンというべきお話で、石像に愛されてしまった男の悲劇。

乱歩の「人でなしの恋」も、ある意味、同工と言える

ムロタニ・ツネ象は、オールド世代には「ピツカリ・ビー」や「ファイトだ!! ピュー太」などのギャグ漫画家として、比較的若い世代には学習まんが「人物日本史」「世界の歴史」の作者として知られているが、その中間辺り、一九七〇年前後の一時期、ホラー漫画を矢継ぎ早に送り出していた。中でも「人形地獄」は、代表作と言える作品。実在の人物そっくりの人形を作り、そこに本物の魂を移す秘術を操る女の話。水木しげるに負けず劣らぬ絵画表現と濃密なエロテイシズムは、とても少年雑誌に掲載されたとは思えない程である。同時期に「虫地獄」（これも名作）や「パビリオン地獄」といった作品も描いており、地獄三部作と言ってよいかも知れない。

坂口尚は、作品数も少なく、余り目立たないが、筋の通った印象的な作品を描いた漫画家である。「生き人形」

という短編は、大怪我を負っても、すぐに治癒してしま
う奇病に侵された少年の話。姉弟ふたりだけで、巨大団
地に住んでいるが、少年は、次々に事故に襲われ、遂に
両腕、両足を失ってしまふ。そして、唯一の頼みの姉も
交通事故に遭って死ぬ。団地の一室に一人残された少年
は、誰にも顧みられず、食料も尽き、何とか隣家と連絡
を取ろうと、自分の歯だけで壁を崩していくが、鉄骨に
行き当たり絶望する…。何とも救いのない、現今の孤独
死を先取りしたかのような作品であった。

扱、彌生三日は雛の節句。雛人形が笑って、姫宮を驚
かした、という話が柳原紀光の「閑窓自語」に見える。

延享年間の京都烏丸の話。

雛は元来が呪術的なものだから、定めし怪しい話が沢
山あるだろうと思うのだが、意外や、近世の随筆類には
驚く程、記述がない。前述の権大納言卿の文など、かな
り珍しい部類である。作者が公家で、宮様のエピソード
ということもあり、辛うじて記録に残ったという感があ
る。

武家や庶民の記録に乏しいのは、察するに、書き手は
専ら男であり、人形、就中雛人形は女の世界に属するも
のであるから、自ら見聞きすることが少なかった、とい
うことではなからうか。

雛が、夜毎、お囃子を奏でたり、歩き回ったり、といっ
た怪談話は、近代以降…と言うよりも、殆ど戦後の物語
や漫画になってからのことであるように思われる。

そこで、山岸涼子の「ひいな の埋葬」の登場である。

これは、実に和製ゴシック・ロマンスの傑作である。活
字の世界で和製ゴシックと言えば、中菱一夫(平井呈一)
の「真夜中の檻」くらいで、まあ、鏡花の「高野聖」や
虫太郎の「黒死館」などもゴシックと呼んで呼べなくは
なし(後者はケルト・ルネッサンスだが)、横溝正史の
「八つ墓村」を始めとする土俗的怪奇ミステリの数々も、
ゴシックのパターンにしっかりと嵌ってはいる。

そんな中で、「ひいな」は漫画とは言え、よく健闘し
ている。元宮家に伝わる雛人形を女系一族の象徴に据え、
遺伝病を絡め、安直な超自然ものに逃げず、一応の合理
的結末を見るのも流石の手腕である。ブロンテ姉妹以後
の系譜上に載るべき作品と言えよう。

二月の「鳥の劇場」下



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

毎年二月には「鳥の劇場」の新作公演がある。今年はブレヒト版『アンティゴネ』が19日から25日まで上演された。以前に大雪で交通手段がなくて行けなかったことがあったが、その後の「どんな大雪でも上演します」という力強いメッセージに私も「何としても行くぞ」という気になっているが、雪の方が逃げてしまっているようだ。

今回は観劇に加えて二つの新たな体験ができた。一つは、ランチ。『アンティゴネ』というギリシヤ悲劇をドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒトが改作した作品とのことで、ドイツ風の特製ランチが公演期間限定でいただけるのだ。「鳥のカフェ」にあるCafé-neeさんのいつも

のメニューとは違って作品に関連したものとということだ。ドイツ料理といえば、ソーセージ、ジャーマンポテト、酸っぱいキャベツと黒パンかな、これらがどんなランチボックスになるのだろう、三品ではなく、と想像力が働かなかったが、受け取ったのは「開けてびっくり玉手箱！」そこにはドイツと日本の食がCafé-neeさんの手によって創り出された美しい世界があった。口に入れると消えてしまう。まさに特製、きれい、おいしいを堪能しながら、ギリシヤ悲劇、ブレヒト、そして「鳥の劇場」、これから始まる舞台への期待感がこんなに高まっていくなんて思ってもいなかった。単なるお弁当ではないのだ。開演前からの粹な演出。ありがたいことに、「鳥の劇場」の「inter」にはその写真が載っていたので、味を思い出しながら再度食べることができた。SNS上では話題になると削除されることも多々あるようですが、こちらは安心、今ならまだ間に合うのでぜひどうぞ。

登場人物の名前がギリシヤ語で人間関係もややこしいところを、これから舞台でそれぞれの役を演じる老人たちが、分かりやすく説明してくれた。毎回思うことだが、「鳥の劇場」では予備知識がなくても安心して物語についていけるようになっていて、いろんな要素がある演劇を観る人それぞれが楽しめるようになっていて。例えば、今回の韓国デザイナーによる衣装もそう。私は気

入って見ていた。宗教的なもの、自然観を韓国の民族音楽や踊りに日本よりも感じるようになったのも、鳥の演劇祭などで韓国演劇と出合ったからかもしれない。舞台上のセリフは今の世の中に照らし合わせてしまった。そういえば、政治家たちのあるまじき言動が次々と目や耳に入ってきて、今までは政治家が好き放題やっていたも何とか私の小さな日常生活は守れると思っていたが、これからどうなっていくのだろうという不安感がこのところ絶えずある。不満や憤り、危機感はどうな形になっていくのだろうと考えるのも恐ろしいことが、劇に引き込まれながら、ランチで満腹の自身と葛藤しながら、頭の中でぐるぐる回っていた。

観劇後には「戯曲講座」に参加した。初めての体験。ブレヒトの他の作品について知れると思ったが、「例外と原則」を参加者が順に読んでいくとは思わなかった。音読なんて何十年やってない。一人で黙読だったらゆっくり後戻りしながら読めるのに。ついていくのに必死。登場人物にあった口調で読める人や、歌うべきところはおもろいものだ。話がわからなくなりそうなおもろいところでは、区切りを入れて解説や問いを投げかけて下さった。戯曲とはこう読むのかと驚きながら、読み込むということの

大変な仕事を知った。俳優さんてすごい、舞台上で演じる技術に加えて深く読む力が要求されるんだ。そんな難しいことを「鳥の劇場」では小中学生もやっている。「小鳥の学校」だ。彼らの公演が3月21日と22日にある。昨年の7月から土日に通ってきての23日間で作り上げた舞台が楽しみだ。私はこの学校で学んだ彼らが、将来、日本のために活躍してくれることを秘かに夢見ている。石破さんも頑張っていらいっしやるようだが……

もしかして悠長に待っている時間などないかもしれない。
時計を見ると18時近くになっていた。6時間後に帰ることがわかっていたら、ランチにドイツビール飲んでもよかったな、ちよっぴり後悔しながら車のエンジンをかけた。

鳥取あれこれ その四十三

内田克彦

(地域研究家)

碧川かたの生涯を調べるための参考資料として、土曜会歴史部会著(代表執筆・高橋政子)『日本近代看護の夜明け』(一九七三年)及び高橋政子著『写真でみる日本近代看護の歴史 先駆者を訪ねて』(一九八四年)がある。著者とされている土曜会歴史部会とは、一九五二年に誕生した保健婦有志の集まりである土曜会の東京会員の何人かが、一九五六年に集まって出来た歴史サークルである。高橋政子がその中心的役割を担っており、代表執筆した『日本近代看護の夜明け』の碧川かたの項の冒頭で、次のとおり記している。

かつて私たちサークルの中心メンバーであった碧川清子(1912～1974)の母かたについて、ぜひ記しておきたい。

彼女は、直接、間接に私たちの最も親しく接し得た大先輩で、生存中には、改まってその記録をとることもなく過ごしてしまっただが、今となっては、なせもっ

と真剣にいろいろのことを聞いておかなかったかと、悔やまれてならない。

因みに、ここに出てくる碧川清子のかたの四女・末娘で、『看護教育』(2000年8・9合併増大号)の中で「看護歴史研究の先駆者」としてその生涯が紹介されている。その中に、都立荏原病院に入院していた作家由紀しげ子が看護婦として勤務していた清と出会ったことが、のちに保健婦をモデルとした小説『ひまわりさん』を書くことになった、とあった。この小説が、吉永小百合主演映画『明日は咲こう花咲こう』の原作となるのである。

さて、同じ号に「戦前農村保健婦の指導者・看護史研究家としての高橋政子」として高橋が取り上げられている。彼女は自伝『いのちをみつめて ある保健婦の半生』を八〇歳となる一九九五年に発刊しており、自らの波乱に富んだ生涯を記しているので、紹介する。

高橋は、一九一五(大正四)年に前川義雄の次女として鳥取市西町の薬研堀に面した五〇〇坪ばかりの武家屋敷に生まれた。二つ上の兄の太郎が「後年左翼運動に走ったため私たちはアカの家庭といわれ、いろいろ苦労しま

した」とあったので、米沢健一著『郷土の青春群像 解放運動に挺身した人びと』に当たると、登場している。彼は、一九三二年三月一〇日の朝、鹿野街道筋の電柱や板塀に「戦争反対」の伝単(宣伝ビラ)を貼り巡らし、鳥取連隊に通じる立川、吉方方面にも同じ伝単を張り出した、として検挙されていた。

前川太郎はその前年鳥取一中を卒業し、家業の花弁園芸を手伝っていた。治維法違反第一次検挙の際特高にマークされた一中の同人誌『街路』の中心的人物は、当時五年生であったこの前川太郎であったのである。

高橋はこれらのこともあってか、鳥取高女卒業の翌年の一九三三年に岡山医科大学付属医院産婆看護婦養成所に入學、一九三五年三月卒業後同大病院勤務、一九三七年四月鳥取市立美保尋常高等小学校に学校看護婦として勤務、ここで農村社会衛生に目覚め、一九三九年九月聖路加女子専門学校公衆衛生看護学専修科入學、翌年四月埼玉県の農村の小学校に代用教員として勤務中の八月山形県庁が企画した農村保健婦養成講習会で出張授業をしたのがきっかけで一月に山形県庁社会課に保健婦指導員として就職することになる。この辺りのことを『写真でみる日本近代看護の歴史』で次のように記している。

これは県行政が、組織的に農村保健婦の養成と設置に1歩を踏みだした最初のものであったが、時代の要請と相まって影響は大きく、翌一九四〇年には10余県が山形県に準じた農村保健婦の教育と設置にのりだした。

高橋より三年早い一九一二年に、現在の鳥取市滝山に生まれた吉田(鹿田)喜久代は、稲葉産業組合の田中新次郎組合長に見込まれて、一九三二年から二年間三井報恩会事業部長遊佐敏彦のもとで学び、一九三四年三月から稲葉産業組合嘱託職員として、「農村保健婦」活動開始している。一九四〇年に全国発売された『砂丘の蔭に』の「昭和十二年四月十四日」の項に次の記述がある。

「美保の学校看護婦の前田さんと云ふのが鹿田さんに挨拶に來ました。トテもシヤンでしたぜ、(略)」

こう書かれているのに、高橋の著作に同郷で初期の農村保健婦の吉田喜久代が出てこないのは何故だろうか。

(以下、続く)

二〇二〇・二・二四

おしよさんとチャペルニア

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

I

「A※はやれスメタナだ、ヤナチェック……チェコの音楽にはやたら熱心だけれどチェコ文学の方は？」
「リルケやカフカですか？」（近代独文の権化のやうな御兩人、実は共にプラハ出身の旧奥帝人）
「それは独文だろ？
チェコ語で書いた人達を読んではか？と訊ねたのさ」
「うん、例へば？」
「ハシエックやチャペックだらうなあ……」
「後者は名前位なら？」
「なんだ読んだ事無いのかい？そりゃあアイコンなあ……」
「ハシエックは「兵士シヴアイク」が國民的だけれど……本当に優れてゐて、世界に誇れるのはやはりチャペックだなあ……」
ロボットつて言葉を、ドイツ語のアルバイトから生み出し概念を創出したのはチェコ人チャペックなんだよ、今は日本の方がロボット先進国だらうが」
「山椒魚戦争、も？SF作家なんですか？」
「さうSFをはじめ様々な小説、演劇と関係深い人なんで戯曲も多く、童話から随筆迄幅広く書ひた、元々ジャーナリストなんでさういふ視点が光つてゐる」
「でもチェコ語は難し過ぎて」「いやドイツ語で沢山出てるし、何だったら幾つか日本語でも読めるか

も？それ位ポピュラーだから」「きみは最近室内で楽器弾いたり複雑なスコアと睨めっこばかり。偶に森に出掛けてニコニコして帰つては来るけど、チェコには音楽ばかりでなく文学も」「美術もありますからねえ」
「勿論ケプラーや、ヤン・フスの如き傑出した人物も居る……」
「こんなふう薦められたのが読みはじめた抑のきつかけ、爾来30年にはなる。」

II

先日、「鳥の演劇祭」の始まった夜にチェコから師の訃報が東京経由で舞ひ込んだ、享年96。大往生には違ひなひが、還暦を目の前に今、僕は師と仰ひだ人に次々と逝かれいよいよ、本やスコアの中だけにしか範を求むる事が出来なくなつて了つた。否、自身、次世代に此の目で視、耳で聴ひた生きた歴史を伝えてゆかなければ？そんな立場に、まうとづくに置かれて居る現實を痛感、それにしても今年の秋風は身に沁み渉る、高い気温に拘はらず。

III

近年ダーシエンカや庭弄りの本がベストセラーに挙がつた事も含め日本でのチャペック人気は益々鰻昇り。師の没後も新刊や新訳の発刊は後を絶たなひ。昔はドイツ語等からの重訳も目立つたが最近ではチェコ語からの翻訳が主流になった。現役のWクンデラ等を含めチェコ文学と

いふカテゴリーもやがて築かれつつある。

ところで、どんな訳に依つても（例へ悪ひそれでさへも）チャペックの文体、いや語り口には独特のドライで飄々とした雰囲気充滿してゐて、例へ其れが地球の、避け難ひ終末をリアルに描く怖ひ内容の作品であつても終始オプティミスムに貫かれ朗らかで淫刺とした調子を一向に喪はなひ。そして獅子文六が漱石の「坊ちゃん」や「わが輩は猫」を評しユーモア小説と呼んだのと同じ意味でのフモアの精神が常に流れてゐて頗る快闊である。拙文如き勿体ぶつた調子・晦渋な表現や周り諄ひ無駄も無く、中学生も楽に読めるやうな軽やかで簡潔な文体。元々の知性や徳が違ふのだ、第一。

IV

仕事で一度だけ、チャペックの舞台を創つた。鳥の劇場にゲストで来られた演出家西田シャトナーさんとの「R.U.R. ロボット」だ。僕はオリジナルの音楽を書き卸し、演出家は其れらを余すところ無く使つて下さつた。しかし「選曲は演出の仕事」を自認する氏。僕には悉く意外な使ひ方に啞然。「へえさう来るかよ?!」しかし、どれも芯を外さなひホームラン性の当たり。或る意味大層チャペック的な演出だつたと云へなくもなひ。

V

常にジャーナリストイックな批評精神に貫かれ、警句

に富んだそれは同時代、やはりユダヤ系として銀幕にフモアと愛を綴つたチャプリンにも通じる。20世紀の預言者達の言葉は今も鮮烈、滔々と湧く泉の水のやう。

0

2019. 12. 1

※Aは筆者ファーストネーム（本名）**「今回の一冊」**「チャペック「絶対製造工場」飯島周訳（ヨージェフ・チャペック挿画）平凡社ライブラリ**「今回のディスク」**①「ヤナチェク「マクロプロス事件」**（チャペック原作）** F. イーレク指揮ブルーノ国立歌劇場 ②「モーツァルト交響曲ハ長調「ジュピター」〜「フィガロの結婚」序曲他 B. ノヴォトウニー指揮プラハ室内管弦楽団 ③「ブラームス弦楽四重奏曲集（全三曲）プラハ Sg. ④ J. S. バッハ無伴奏 Vln ソナタ「パルティータ（全6曲）BWV 1001〜1006」B. ノヴォトウニー Vlnrec. 1969 スプリフォン

（画 A・T）



大根の皮

あきの素生

(くうねるめがね)



この冬は大根をよく食べた。お鍋、おでん、ポトフはもちろん、暖かい日が続いたためか、サラダや野菜スティックも、いつもの冬より食卓に並ぶ機会が多かった。

大根は、本体(?)もさることながら、「皮」の部分も好物だ。といつても、皮付きのまま料理することはない。たわしでごしごし洗い、皮をむく。のちのち食べるので、なんとなく、たわしで洗っている。これが正しい処置なのかは知らない。本体はその日に食べてしまうが、皮は水気を切ったあと、冷蔵庫に入れておき、ある程度量がたまったらとところで調理する。千切りにして塩もみし、少し置いてからしぼる。レモン汁と、あれば「レモスコ」(レモン汁や酢、唐辛子、藻塩で作られた調味料)、オリーブオイルで和え、最後に黒こしょうを少々。皮の、ばりばりした歯ごたえと、少しの辛みがいい。これは本

体では出せない味わいだ。塩きんぴらにすることもある。一番好きなのはぬか漬けたが、自分ではぬか床を管理しきれないだろうな、と臆して、手を出していない。

皮の味、食感が好みなのは間違いない。だけれども、大根を余すことなく、限りなく百パーセントに近いところまで食べ切りましたよ、という感覚が、さらに私を「皮食」に駆り立てている気がする。

高校生の頃、友人が、ある女性アーティストを見て、この人は、自分のいいところを百パーセント活かしている感じがする、と言った。なるほどそれで魅力的なのか、と腑に落ちた。外見が大きな意味を持っていた(持っているようにみえた)年頃、こういう外見だったら、目が、まつげが、鼻が、口元が、髪型が、服装がこうだったらよし、という基準が外側にあつて、それに合わせるなり、無いことや足りないことをだめだと感じてうつむくなりしがちな中で、自分にあるものを最大限引き出して自分なりのよきを作るという考え方は、とても素敵だと思った。大人になればなるほど、自分との付き合いも長くなり、知ったり折り合ったり受け入れたりして、外見に限らず、自分の活かし方に長けてくるけれど、大人の入口に立つか立たないかくらいの当分の私には、遠い国の話のようで、ただあこがれた。あと、百パーセントっ

てところもいいな、と思った。

百パーセント、最大限、めいっぱい、最短距離を最速で、それがかなうと気持ちがいい。パズルのピースがすべてぴたりとはまった感じというか。

けれども、先日、部屋の模様替えをしているとき、このスペースにはまだものが置けるぞ、とか、実用性のないものをこんなに飾ったりしていいのか、と考えていることに気付いて、愕然とした。毒されている。意味あるものを、最大限空間を活かして、めいっぱい置かなければならないという考え方に。前にも、ここにデッドスペースがデッドスペースが、とさらなる収納場所を見つけて喜ぶ夢を見て、自分でもちよつと引いたことがあるが、ここまですは。あまりよくないな、と感じて、模様替えを途中やめにした。

ぴたりとはまったパズルが求められる場面も、もちろんある。そうやって捻出したものが、自分やひとの役に立つことも。

一方で、それを常に求め続けるのは、あまりにしんどいし、もたない。そもそも、自分の脳内スピードと、現実世界にあらわれている事象がマッチしていなくて、ほ

かのひとからは、そんなふうに見えていない可能性だってある。実際、過去に「自転車をちやりちやりちやりちやり（めいっぱい速く）漕いでいる」と公言していたところ、後日その姿を見かけた友人から、「どう見ても、ちやりちやりりって感じだったよ」と爆笑された。そう考えると、空しいことだ。

いまは、少しだけ好きなものが飾られた部屋を見ながら、余白があつていいんだ、と自分に言い聞かせている。

とはいえ、大根の皮は好きだ。百パーセントやめいっぱいのためじゃなくて食べたいから食べる、でも、たまに食べないこともあるかも、くらいの気持ちで。

イラスト あきの素生



片想い



ドラメリア
(座敷わらし)

わたしの話ではない、猫の話。

猫を飼い始めて十三年、二匹と暮らすことになって十年目を迎える。後輩猫のあんずは、先輩のチャイに片想いをしてている。後をついて歩いたり、毛づくろいをしてあげたり、ぴったり寄り添って眠ったり(チャイが起きているときは許さない)ので、時差を利用した偽装添い寝)。傍から眺めていると大変いじらしいが報われたことはなく、いつも邪険に追い払われている。もともとわたしと一対一の関係だったチャイは、ふたりぐらしに後から割り込んできた若い娘が目障りでしょうがないらしい。しぶしぶ存在を許してはいるが好意は抱いていないようで、好きの不等号は常に同じ向きのままだ。

一方、このあんず。世界は「お姉ちゃんとおあたし」で完結しているのか、飼い主であるわたしのことは温熱機能付き自動給餌機程度にしか認識していないようだ。たまたま傍に座ったあんずをそろそろなでると、電気でも

走ったように飛び退る。まあ、わたしだって、冷蔵庫から手が生えて急に巻き付いて来たら驚いて飛び上がるだろうが、……しかし、あんまりではないか。

もつとも、このあんずが唯一わたしに能動的にすり寄ってくる状況も存在して、それはチャイと仲良くしているときだったりする。膝の上でくつろぐチャイとわたしの胴体のわずかな隙間にぐいぐいと入り込み、甘えたしぐさをしてみせるあんず。かわいい。かわいいが、これは要するに本命に嫉妬させるために当て馬といちやついてみせているのでは……と少し複雑な気分にもなる。



・編集後記:

このところ、トイレットペーパーが品薄になっていて困ります。マスクと違ってキッチンペーパーで自作はできないし……。

ドラメリア(編集長)

ノンフィクションライターの三宅玲子さんがウエブマガジンに定有堂をレポートしてくださいました。濱崎洋三著『伝えたいこと』定有堂書店刊から同志社大学が入試(日本史)に出題。定有堂教室「読む会」の創設者でもあります。

奈良敏行(発行人)